

# 研究所だより

第301号

2010年10月28日

発行：土佐清水市教育研究所

TEL 82-3015

<子どもに好かれる先生5つの法則>—甲本 卓司 著

1. 一緒にしてくれる先生が好き

①. 実技教科は子どもと共に

一緒にしてくれる先生を子どもは望む。

例えば、図工や家庭科などの時、作り方がわからない場合は教師が教えてやればよい。家庭科の裁縫や図工の工作などは、その様な場面がたくさんある。自分で考えてもできるようにはならない。誰かに聞いて、教えてもらい、場合によってはやって見せて、手取り足取り教えてできるようになるのである。

体育でも跳び箱や鉄棒の指導などは、個別で行う必要がある。例えば、逆上がりや指導するには、休み時間などを使って継続的にしないとできるようになることは難しい。

実技系の教科では、できない子には教師が手取り足取り教える場面が必要である。

②. はりつけの個別指導は厳禁

実技以外の教科で個別指導を行う時は考慮しなければならないことがある。実技指導であればできるできないがはっきりする。出さない子ができるようになれば、できる子はできない子の頑張りがわかる。

ところが、実技教科以外はそうはいかない。できた事実が、すぐには見えない。個別指導することで、できない子が浮き彫りになってしまうのである。教師は親切心でやっているのかもしれないが、当人にとってはたまらなく嫌なものなのである。わからないことを周りに知られることが辛いのだと後で気づいた。

向山洋一氏は、はりつけの個別指導について次のように言う。

【授業中の個別指導は「完全にさせる」ではなく「短く何回もさせる」ということを原則にせよ。】

一番有効なのが赤鉛筆で薄く書いてなぞらせることである。この時にポイントがある。

【教師が、赤鉛筆で書いているとき、授業中全員が練習問題に取りかかった時だ。後ろから、そっと近寄り、子どもの横に寄り添って、ノートに薄く書いてやるのだ。子どもは目の前で「同じ方向に」書いてくれる教師の赤鉛筆を見ているのだ。】

③. 全体の空白を作らない

実技系でも他の教科でも個別指導を行うためには、全体に空白を作つてはいけない。

【まず全体に、大きな課題を与えよ。しかる後に個別に指導せよ】

何をしたらよいのか、終わったなら何をするのか指示しておく必要がある。個別指導はその後にするのである。

<次回・厳しい先生が好き>

## <土佐清水市の伝説（民話） 2 >

### お藤が淵（お藤がトドロ）

益野川の上流奥益野をさらに一里程遡るとお藤が淵がある。

その昔、この近くに百姓の夫婦が住んでいた。一女が生まれお藤と名付けて可愛がっていた。お藤は大きくなるにしたがって、顔かたちの美しい評判娘になった。淵の近くに栗を植え、お藤はその番人になって毎日毎日そこに通った。

そうして淵の辺に立ち水面を見て、水鏡で自分の美しい姿にそっとほほ笑み、髪を梳るのであった。時には淵の東岸の藤つるをよじ、ロウのような美しい裸体を水浴びすることもあった。

ある日のこと、愛犬を連れて淵にきて髪を梳っていた。ところがたまたま一筋の髪の毛が水面に落ちると、美しい小蛇がこの髪をくわえて水中に沈んで行った。

お藤は面白がり、また幾筋もの髪を抜いて蛇に与え、恍惚となって時を移した。お藤が連れてきた愛犬は狂気のようになって家に帰り、父親の裳裾をくわえて引き狂う。両親も平常に違った犬の態度に驚いて、何事であろうと犬の後についた。

犬はまっしぐらに栗畑から上流さして走って行く。両親は初めてお藤の身の上何か変わったことがあるのかと驚き、気をもんだ。淵の近くになると両親は大声を上げ、「お藤、お藤」と連呼した。しかしお藤の姿は見えない。両親は犬に従った。段々進むと、犬は巖上に立ち淵をにらんで盛んに吠え立てる。

両親は、「さてはお藤はこの淵に入ったのか。」と驚き淵を眺め泣き叫んだ。しかし応えるものは轟々と渦巻く水音ばかり、見えるものは渦巻く白い泡である。

お藤はこの淵の主、竜蛇に捕らえられたのであろう。狂気のようになった両親は、山深くお藤をたずねて登り上ってとうとう山頂で悶死してしまった。今二つの石碑がある。これは両親を祀ったものである。また淵の上に小さい祠が建って、龍神とお藤の霊を祭った藤神社がある。このことがあってから、今でも益野川流域では、女の子にお藤という名をつけないという。



### 猿野の由来

昔、奥猿野（現上野）の氏神様に怪物が出て村人を困らせていた。その上、この氏神様に毎年、部落から娘を一人、人身御供として奉納しなければ天災地変が起こるとされていた。神様のやり方にしてはあまりにも悲惨なので、村人は不思議に思っていた。

ある年に、この村を通りかかった侍（岩見重太郎とも、宮本武蔵とも言われている）がこのことを耳にし、あまりにも悲惨なやり方にこの疑いを晴らしてやろうと早速人身御供として奉納される娘の身代わりとして自分が箱の中に入った。

村人は侍の入った箱を氏神様の前に奉納して、この成り行きを見守っていた。夜になって辺りが暗くなると、大きな音と共に怪物が現れ、だんだん箱に近づいて、箱の蓋に手をかけると同時に、中にいた侍が刀を振りかざして怪物を斬り殺した。

そこで怪物を見ると正体は猩々であった。これを供養しなければたたりがあろうと言うことで、村の北のはずれに埋めた。その後、この地は、猿王宇（猿押）と呼ばれるようになったと伝えられている。